

17 耳鳴に対する高気圧酸素療法の治療効果

桑島 秀 大塚尚志 佐藤宏昭

(岩手医科大学耳鼻咽喉科)

【目的】耳鳴は聴覚系を中心とした障害によって現れた症状の一つと理解されているが、未だその病因病態は必ずしも明確にされていない。そのため、耳鳴の治療は古くから行われ現在まで数多くの治療法が考案されているが、未だ治療法に確立されたものがない。高気圧酸素療法は、耳鼻咽喉科領域においては突発性難聴の治療に有効性が確認されており、その作用機序は内耳の低酸素状態の改善、代謝の賦活による内耳機能の改善と考えられている。そこで今回、耳鳴症例に対し高気圧酸素療法を施行しその治療効果を検討した。

【方法】平成11年から平成15年5月までに岩手医科大学耳鼻咽喉科を受診した患者の中で耳鳴治療を目的とし高気圧酸素療法を施行した37例を対象とした。性別は男性21例、女性16例で、平均年齢は男性63歳、女性61.3歳である。これらの症例に対し、第2種高気圧酸素治療装置を用い治療を行った。治療は土、日曜日および祝日以外は連日施行し、10回から33回まで平均17回施行した。また内服治療としてビタミンB12製剤、循環改善剤の内服をおこなった。耳鳴の評価には10分法による自覚的評価法を用いた。治療前の耳鳴の大きさを10とし、高気圧酸素療法終了後に10に対してどの程度の大きさに変化したか尋ねた。1~3を著明改善、4~6を改善、7~8を軽度改善、9~10を不変とし評価した。

【結果】自覚的評価に基づいた耳鳴症例37例に対する高気圧酸素療法の治療成績は、著明改善5例、改善6例、軽度改善9例、不変17例であった。著明改善、改善例を合わせ有効とすると有効率は11例29.7%、不変例は17例45.9%であった。有効例と不変例を比較すると平均年齢、罹病期間において有意差は認めなかったが、不変例では騒音歴を有する例が多く、有効例は11例中1例であったのに対し、不変例は17例中8例にみられた。

18 硝酸ナファゾリン鼻腔内投与が音響耳管機能検査法に及ぼす影響

諸岡浩明 若杉義隆 澄川耕二

(長崎大学医学部附属病院麻酔科)

【目的】高気圧酸素治療を開始する際、加圧時に耳痛を訴えられることがある。この場合、「耳抜き」操作を行っても、それでも耳痛が続く場合は、治療を中止する、あるいは鼓膜切開を行なった後に再度治療を行なっている。耳痛を訴えられる場合、耳管が完全に閉塞している場合もあるが、上気道炎や鼻風邪を引いている時に、耳管の開口部が炎症で腫脹し狭窄を起こしている場合も多い。この場合、鼓膜切開を行なうかどうかの判断に迷うことも多い。また、硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与が一時的に耳痛予防に効果があるとして使用されることがあるが、耳管機能測定による比較を行なった報告は見られない。今回、硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与が音響耳管機能に及ぼす影響を耳管機能検査装置を用いて測定したので報告する。

【方法】インフォームドコンセントを行い同意を得られた成人37名を対象とした。硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与を行なう前後の音響耳管機能を耳管機能検査装置(ET-500, 永島医科器械)を用いて振幅と耳管開閉持続時間を測定した。あわせて、高気圧酸素治療装置(セクリスト社製Model 2800J)により加圧を行った際の耳痛の発生と音響耳管機能検査の結果の関連を検討した。

【結果】硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与5分後に、振幅と耳管開閉持続時間ともに増大を示した。投与前の振幅が10dB以下の症例は、振幅と耳管開閉持続時間ともに投与後に有意な増大を示したが、振幅が10dB以上の症例では、振幅の増大は有意であったが、耳管開閉持続時間は有意な増大を示さなかった。硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与後の振幅が4dB以下であった2例で耳痛のため加圧を中止した。

【結語】硝酸ナファゾリンの鼻腔内投与により耳管機能が改善することが示唆された。音響耳管機能検査での振幅が4dB以下の場合、加圧時の耳痛発現に十分注意が必要と思われた。